

ハイデルベルク信仰問答より

問 73 それでは、なぜ聖霊は、洗礼を再生の水、罪の洗い潔めと呼ぶのですか。

答え 神は十分な理由なしに、このようにはお語りになりません。神は、ちょうど、からだの汚れが水によって取り除かれるように、私たちの罪はキリストの血と御霊とによって、取り去られることを、洗礼によって私たちに教えるばかりでなく、さらに大切なことは、神の保証のしるしによって、私たちがちょうど、水で自分のからだを洗い潔めるように、神は霊的に私たちの罪を真に洗い潔められることを、私たちに確信させることを願っているのです。

ここでは、罪の赦しの要となっているのが「聖霊」(＝御霊)であるということが強調されています。聖霊ご自身が、洗礼式を指して、「これによって罪のきよめが起きる」と宣言しておられるようです。ただ、これまでも学んできましたように、儀式そのものに効力があるのではなく、罪が赦された事実を公に表すのが洗礼式であるはずで

答えの内容は大きく二つに分けることができます。

- ① 神は、ちょうど、からだの汚れが水によって取り除かれるように、私たちの罪はキリストの血と御霊とによって、取り去られることを、洗礼によって私たちに教える
- ② 神の保証のしるしによって、私たちがちょうど、水で自分のからだを洗い潔めるように、神は霊的に私たちの罪を真に洗い潔められることを、私たちに確信させる

罪の赦しは本来視覚的に確認することができません。まずこのことを人間同士の関係において考えてみましょう。金銭的な罪であれば、返すべきものが返されれば基本的に和解は成立します。しかし、お金では解決できない罪もあります。一生心から消えないような傷つく言葉が発せられてしまった場合、それは人の心の中で解決困難な問題となって残存します。あるいは、肉体的なバイオレンスも被害者の心に深い傷を負わせ、その経験が人生全体の中で様々な負の連鎖を生んでしまうかもしれません。配偶者の不貞なども、謝罪や賠償金だけで解決するものではないことは誰もが理解できるはずで

す。「赦します」と宣言しても、記憶から消えるわけではありません。このように、罪の赦しとは、実は極めて不確実な性質のものであることが分かります。

では、神と人との関係においてはどうか。私たち人間は、神に対してどんな罪を犯しているかが、そもそもなかなか理解できないのです。神が嫌われる行為や心の状態があるということは、聖書の律法を通して知ることができます。十戒に照らしてみるならば、神ならぬものを拝むこと、主の御名をみだりに唱えること、安息日を聖別しないこと、親を敬わないこと、殺すこと、姦淫すること、盗むこと、嘘をつくこと、他人のものを欲しがることは、神が好まれない事柄であるということが分かります。しかし、これらの戒めはやや漠然としている

ため、私たちの生活のどの部分でそれらを犯しているかが不明瞭な面があるのです。それゆえに、私たちは神に対してどの程度の罪を負っているか、一生かけても数的に表すことはできないでしょう。

しかしながら、罪を赦すことにおいて、神は100%それを実現することができるのです。この点で人間同士の関係とは明確に一線が画されます。人間には100%の許しを与えることは困難ですが、神にはそれができるのです。私たちが犯した罪をことごとく拭き去り、永遠に思い出さないということがおできになる。それは何によって実現しているかといえば、そう、主イエスの死による罪の償いを通してなのです。主イエスが完全なる大祭司にして完全なる犠牲の小羊であられるがゆえに、神の怒りは十全になだめられました。主イエスを信じた者に対して、神の側にはもう怒る理由が存在しないのです。そして、この神の赦しにあずかった人にとって、人と人との間の経験はまったく意味が変わってくることになります。

洗礼式に表されている意味がここにあるということをご理解いただけるのではないのでしょうか。水によって体の汚れが物理的に落とされるように、主イエスの血潮は私たちの霊的な（見えない）罪をことごとく落としてしまう。水では落とし切れない汚れがあるかもしれませんが、主の血は一つたりとも「洩れ」を残しません。答えの後半に「ちょうど~ように」という表現があるのは、私たちが日常経験している「水洗」という確かな事柄に照らして、目に見えない主イエスの「血洗（奥村による造語）」がそのように起きていることを知らしめるためです。主イエスに依り頼むことがどんなに安心であるかが分かる、そのような問答ではないのでしょうか。